月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.145



エマが華麗なドレス姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 碧の軌跡

いつか貴方とお茶会を

プロローグムービーが絶賛大公開中！
アドルやエレナ、チェスターのイラストも到着！

『イース・メモワール -フェルガナの誓い-』

龍王ガルシス、ここに復活!?

も～っと集まれ！ファルコム学園

エステルたちの危機に駆けつけたレーヴェ
彼の真なる目的とは?

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS





プロローグムービーも絶賛公開中！

シリーズ屈指の名作『イース フェルガナの誓い』が、Nintendo Switch 版として蘇る『イース・メモワール - フェルガナの誓い -』。今作の醍醐味のひとつが、主人公のアドル・クリスティンにボイスが追加されたことだが、現在公式サイトでは、アドルを演じる梶裕貴さんのナレーションによるプロローグムービーが絶賛公開中となっている。
今回は新たに描き下ろされた主要キャラクター達のイラストも一挙大公開！

製品情報：イース･メモワール -フェルガナの誓い-
発売日：2023年4月27日発売
ジャンル：アクションRPG
対応機種：Nintendo Switch
プレイ人数：1人
価格：【パッケージ版】4,400円（税抜）
　　　【ダウンロード版】4,400円（税抜）
CEROレーティング：B（12才以上対象）







アドル・クリスティン　CV：梶裕貴



本作の主人公で、燃えるような赤い髪と少年のように澄んだ黒い瞳を持つ青年。
生まれついての冒険家で、いつも新しい世界と冒険に対する好奇心に満ちている。
古代王国イースやオベリア湾、セルセタの樹海など各地を旅していたが、相棒ドギの故郷に関する不吉な噂を耳にして、フェルガナ地方を訪れる。

ドギ　CV：玄田哲章



元盗賊だが義理人情に厚く、岩盤すらも砕いてしまう剛腕の持ち主。
古代王国イースを巡る冒険でアドルと意気投合し、その後は相棒としてアドルと共に各地を旅するようになった。
旅先でフェルガナ地方に関する異変を聞き、８年ぶりに故郷を訪れることになる。

エレナ・ストダート　CV：野中藍



フェルガナ地方・レドモントの街で暮らすチェスターの妹。
ドギの幼馴染にあたり、幼い頃は兄やドギに混じって野山を駆けまわる活発なおてんば娘だった。
年相応の可憐な少女に成長したが、その内には激しいものを秘めており、時折周囲を驚かせるような行動をとることも。気立てがよく、働き者で街の人々から愛されている。

チェスター・ストダート　CV：伊藤健太郎



ドギの幼馴染にして悪友。
12年前、孤児となっていたところを妹のエレナとともにエドガー町長に引き取られ、当時宿屋で働いていたドギと知り合うことになった。
その後、街に小さな家を構え、妹を養いながら町長の仕事を補佐していたが、１年前、フェルガナ地方に異変が起きた直後に街から姿を消してしまう。

シスター・ネル　CV：久川綾

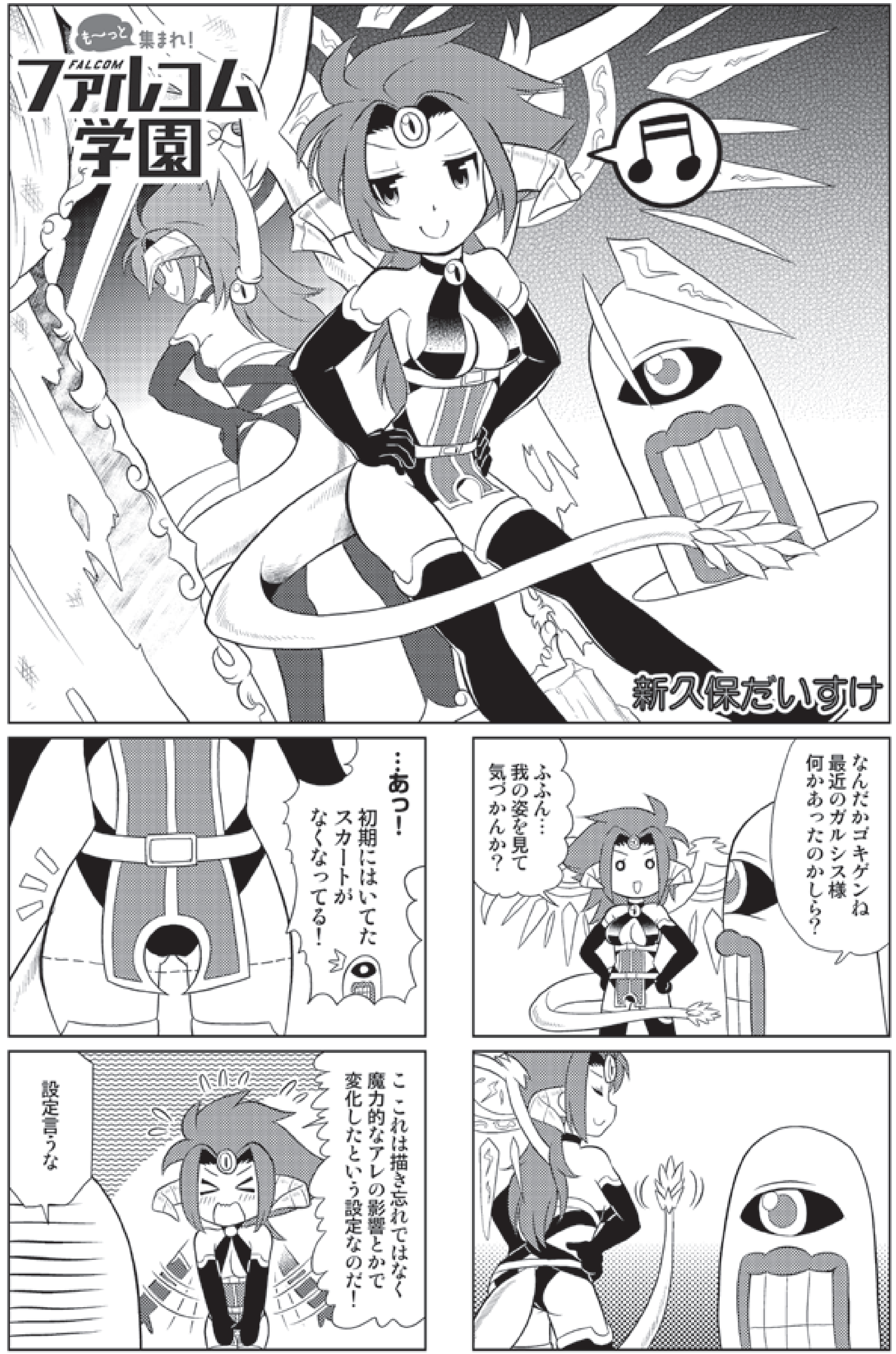


レドモントの礼拝堂に勤めているしっかり者のシスター。
落ち着いた雰囲気と慈愛に満ち溢れた女性で、幼い頃から知るチェスターとエレナからは実の姉のような存在として慕われている。

ニコラス司教　CV：島田敏



威厳ある物腰と風格を持ち合わせた星刻教会の司教。
フェルガナの人々から尊敬を集める人格者であり、領主マクガイア伯に対しても毅然とした態度をとる。
３年前まではレドモントの礼拝堂で神父を務めていたが、現在はバレスタイン城の礼拝堂でフェルガナ教区を統括している。


も〜っと集まれ！
FALCOM
ファルコム学園
新久保だいすけ
なんだかゴキゲンね 最近のガルシス様 何かあったのかしら？
ふふん… 我の姿を見て気づかんか？
…あっ！ 初期にはいてたスカートがなくなってる！
ここれは描き忘れではなく魔力的なアレの影響とかで変化したという設定なのだ！
設定言うな


アイツがほしい
尻尾が復活したってことはガルシス様が本来の力を取り戻しつつあるってことね
めでたい!!
ヴァン・アークライドだったか これもすべてあの人間の功績と言えよう
我の一日も早い完全復活のためにもぜひ我が右腕として迎えたいものだが
は…!?
今まで右腕として奮闘してたアタシの立場どうすんのよ!?
はははは ずいぶん厚かましいな この通常モンスター
人の欲望
安全第
バイト
バイ
人間は欲望に弱い… 黄金でも積んでやればすぐひざまずくだろうよ
言ってもガルシス様 他人にあげるほど財産ないでしょ
羽としっぽは魔力を使うのでふだんはしまってる という設定
あームリムリ あのオッサンそういうの通じねぇと思うぞ
私が依頼したときも基本料金以上のお金は受け取らなかったです
バカな…人間なら何か欲望のひとつも持っているだろう！
そうだ！「英雄色を好む」と言うくらいだし 美女に誘惑されたらどうだ!?
わ わかったわ… アタシのこの熟れた肉体が役に立つというなら!!
はははは 今日はギャグもキレキレだな この雑魚モンスター

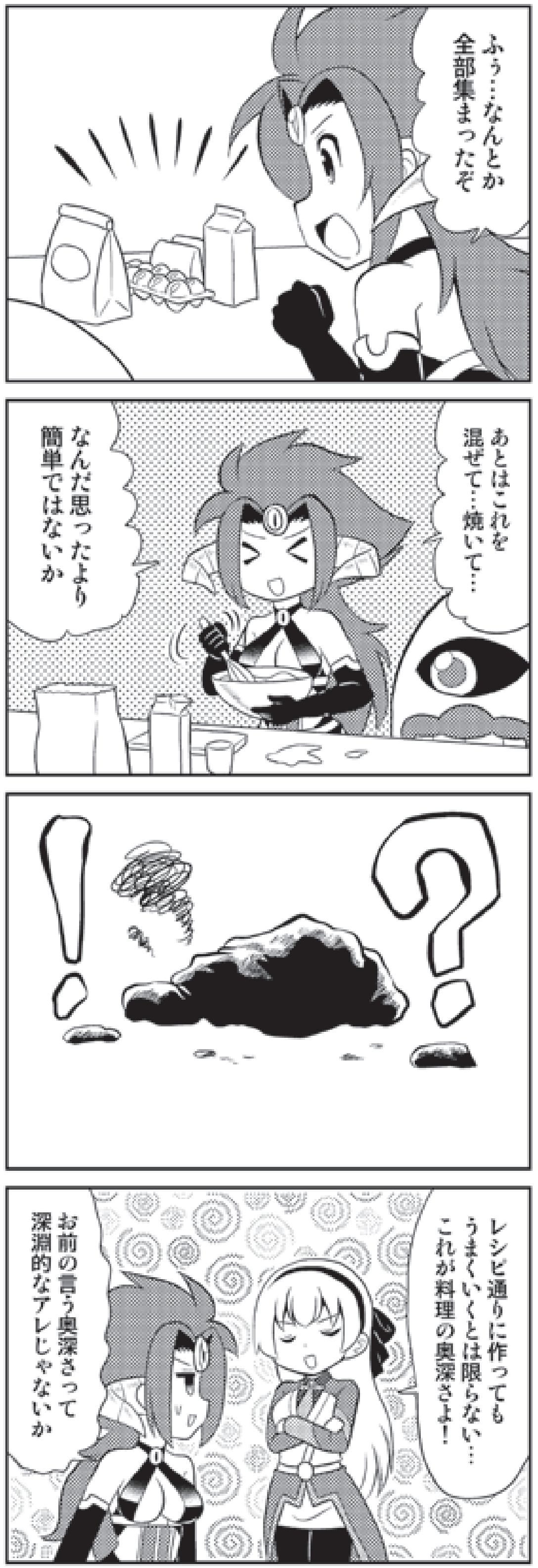
ヴァンの弱点



素材集め



魔王様お料理する



お誂え向きな魔物



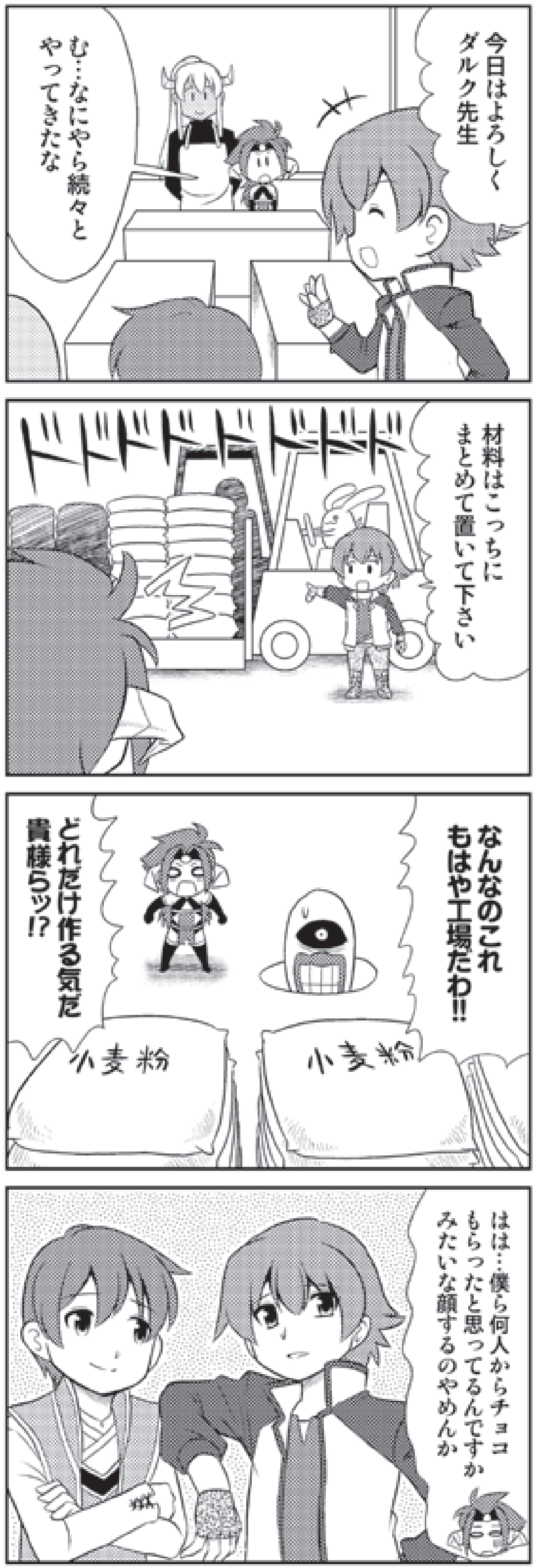
可愛げある男たち



料理の差



モテ男たちの恒例行事



見るスティン



愛を知る魔物



突然の第三勢力



愛について語ろう



未来に立ち込める暗雲

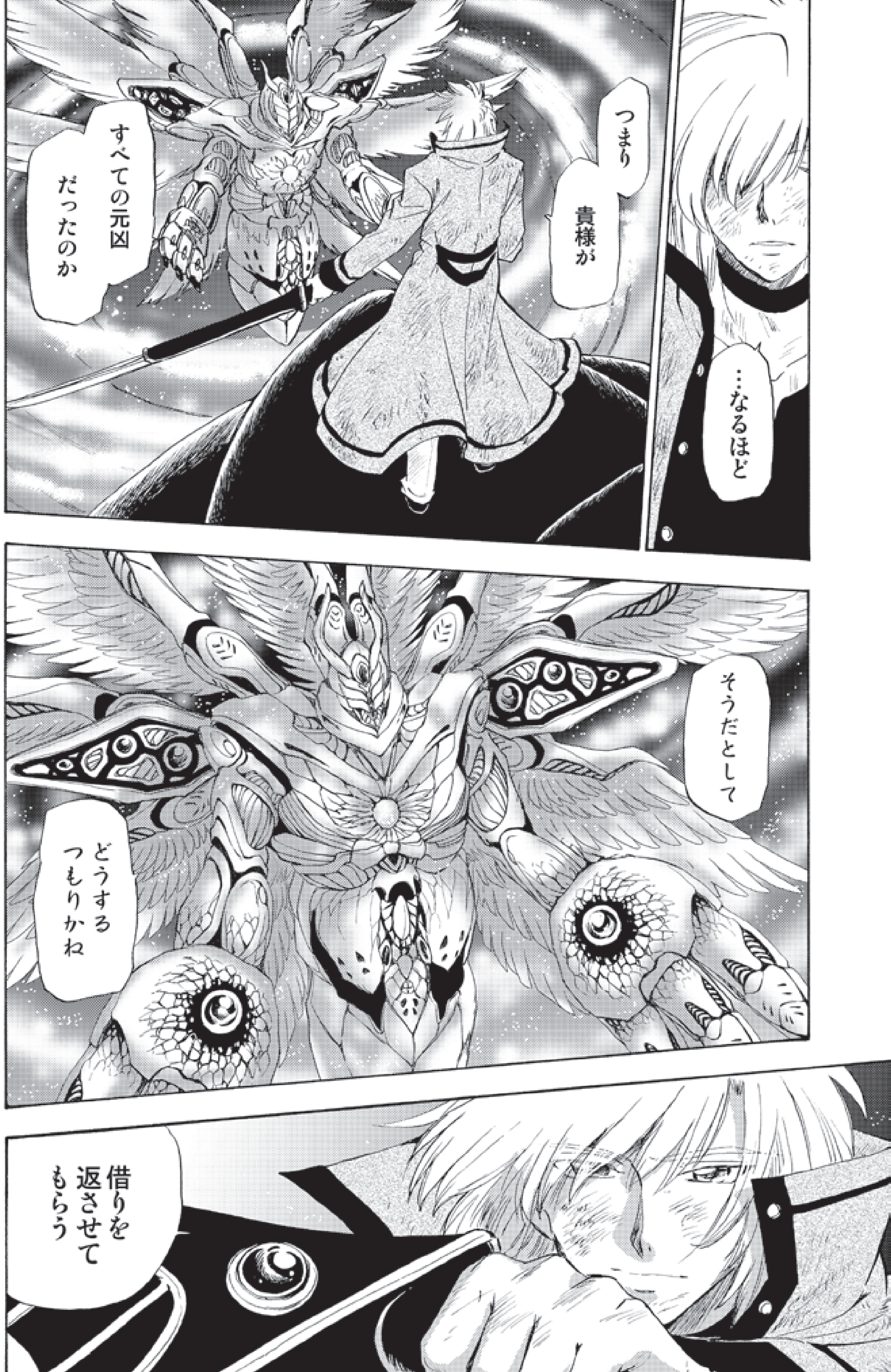



空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
レーヴェ!?
レーヴェ君! 来てくれたのだね!
そんな…
無茶だわ
回復魔法はかけたけれど
まだ
あんなケガで動いたりしたら
フン… 死にぞこないが…
とどめを刺しておくべきだったな…


しかしレーヴェ
今更君が来たところで《環》を相手に何ができるというのかね？
ワイスマン
最後にひとつ聞いておきたいことがある
「ハーメルの悲劇」
貴様はどの程度関与していた？


ハーメルの悲劇？
リベール王国とエレボニア帝国の戦争の発端となった虐殺事件のことかね？
あれは王国との侵略戦争を始めるために帝国内の主戦派が企てた事件だったのだろう？
それも貴様の策略だったとしたら
リベール王国にある《輝く環》を手に入れるために——
10年前の戦争すらそのための仕込みだったのなら
すべてのことに説明がつくと思ってな


よく気がついてくれたね
君の指摘通りだとも
もっとも私は首謀者にハーメルの名を唱いただけだがね
それだけで瞬く間に戦争へと発展してくれたのだよ
ククク
あの件は実に興味深かった
人間の業を感じさせる実験結果だったよ


…なるほど
つまり 貴様が
すべての元凶だったのか
そうだとして
どうするつもりかね
借りを返させてもらう


愚かな
《輝く環》と融合したこの私に


ば……
馬鹿な……
《環》の
絶対障壁が……
…そうか！
その剣は！


そう
俺が
盟主から
授かった剣
貴様の杖と同じ
外の理で
造られた
魔剣だ
《剣帝》が
魔剣(クルンバイター)を振るって
貫けぬものは
ない！
次回に続く



FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税） ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-』オリジナルサウンドトラック上巻・下巻と、スリーブ仕様の上下巻セット発売!!

『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-（クリムゾン・シン）』の劇中曲を収録した音楽アルバム『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- オリジナルサウンドトラック』が、上下巻各初回生産分限定の特殊パッケージ仕様で登場。さらに、上巻・下巻（全90曲）を専用スリーブに収納したスリーブ仕様の上下巻セットも同時発売中です。
また、各音楽配信サイトでのダウンロード販売のほか、「mora」「music.jp」などハイレゾ配信サイトでのハイレゾ音源版販売、「Spotify」「Amazon music」「Apple Music」「YouTube Music」など定額制音楽配信サービスでの楽曲配信でもお楽しみいただけます。



英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- オリジナルサウンドトラック【上巻】（全46曲／CD2枚組）

【上巻】では解決事務所の日常をテーマにした『Hard-Boiled Short Cake』や通常戦闘曲『Work Out a Solution!』、第Ⅱ部用戦闘曲『黒月繚乱』など、プロローグから物語中盤にかけてストーリー本編で使用された楽曲を中心に収録。

■**価格：**【CD盤】2,000円（税抜）／【DL版】833円（税抜）／【ハイレゾ音源版】833円（税抜）
※DL版、ハイレゾ音源版はDisc1、Disc2それぞれの販売価格となります。



英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- オリジナルサウンドトラック【下巻】（全44曲／CD2枚組）

【下巻】となる本作では、OP曲『CRIMSON SiN』、ED曲『現在（いま）という煌き』のフルバージョンに加え、『Days Gone By』『匣の中に在るのは…』などアップデートで追加された《御伽の庭城（メルヒェンガルテン）》アフターストーリー用の楽曲もまるごと収録。

■**価格：**【CD盤】2,000円（税抜）／【DL版】833円（税抜）／【ハイレゾ音源版】833円（税抜）
※DL版、ハイレゾ音源版はDisc1、Disc2それぞれの販売価格となります。

英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- オリジナルサウンドトラック【上下巻セット版】（全90曲／CD4枚組）

「英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-」オリジナルサウンドトラック「上巻」「下巻」の2作品をセットにした、全90曲収録のコレクターズアイテム。作品のタイトルにもなっているCRIMSON SiN（クリムゾン・シン）をイメージした専用スリーブケースに上巻・下巻を収納した、完全版仕様のオリジナルサウンドトラックとして発売。
※収録曲は単品発売の上巻・下巻と同じです。



■**価格：**【価格：【CD盤】4,000円（税抜）／【DL版】3,333円（税抜）／【ハイレゾ音源版】3,333円（税抜）
※「英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- オリジナルサウンドトラック【上巻】」、「英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- オリジナルサウンドトラック【下巻】」を専用スリーブケースに収納したセット商品となります。

■**音楽配信サイト**
《iTunes® Store》http://itunes.apple.com/jp/artist/id120174391
《Amazon Music》http://j.mp/VSjC6N
《mora》http://mora.jp/artist/299183/all
《music.jp》http://music-book.jp/music/Artist/141849/Album

■**ハイレゾ版音源配信サイト**
《moraハイレゾ配信ページ》
http://mora.jp/artist/299183/h#discArea
《music.jpハイレゾ配信ページ》
http://music-book.jp/music/Artist/141849/hiresoalbum
《e-onkyo music》
http://www.e-onkyo.com/search/search.aspx?label=Falcom
《OTOTOY》
https://ototoy.jp/_/default/a/124419
※ハイレゾ音源版は全曲96kHz／24bit(WAV＆flac)となります。
※「iTunes® Store」では高音質・DRMフリーのiTunes Plusで世界111ヶ国、ファルコム楽曲5,204曲を配信。

■**定額制音楽配信サービス**
《Spotify》
https://open.spotify.com/artist/5WFofzgRxpVNkpwg9XRSdg
《Amazon music》
https://music.amazon.co.jp/artists/B00B4R35JQ/falcom-sound-team-jdk
《Apple Music》
https://music.apple.com/jp/artist/falcom-sound-team-jdk/120174391
《YouTube Music》
https://music.youtube.com/channel/UCOOOdHr4emlkr02wjynGF3Q

■**関連サイト**
《「英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-」公式サイト》
https://www.falcom.co.jp/kuro2/
《「ファルコム 音楽CD」情報ページ》https://www.falcom.co.jp/music
《ファルコム音楽フリー宣言》https://www.falcom.co.jp/music-use

『イース35周年展』全国4ヶ所で開催！



イースシリーズ35周年を祝して、ジーストア各店にて「イース」から「イースⅨ」までの作品紹介などが期間限定で展示されます。

特製ステッカーをプレゼント！
日本ファルコム関連商品を3,000円（税込）お買い上げごとに、特製ステッカー（全11種）をランダムで1枚プレゼント。
※1会計で33,000円（税込）ご購入いただくと、全11種がコンプリートします。



■**会期：**ジーストア大阪／ジーストア仙台
3月4日（土）～3月12日（日）
ジーストア名古屋／ジーストア小倉
3月18日（土）～3月26日（日）
■**入場料：**無料
■**イベント詳細はこちら**
https://www.geestore.com/event/gallery/ys35th/

ネタバレインタビューも収録！『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- 公式ビジュアルコレクション』好評発売中！



『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-』の各種イラストや設定画を網羅しているほか、本書初公開の設定画や絵コンテなども収録している日本ファルコム公式のビジュアルブック。近藤季洋社長が語る本作のネタバレインタビューでは、物語、キャラクター、残された謎、次回作の注目ポイントなどについて迫ります。

■**仕様：**A4判／160ページ
■**定価：**2,940円（本体2,700円＋税）
■**商品紹介はこちら**
https://dengekionline.com/articles/162134/

『フィー・クラウゼル』がフィギュア化決定！



コトブキヤ×日本ファルコムが送る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画６弾として、トールズ士官学院《Ⅶ組》メンバーから「フィー・クラウゼル」が初の立体化決定。続報をお楽しみに！

■**コトブキヤコレクション2023**
https://www.kotobukiya-collection.com/figures/11229/

2月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！

パーティー・エマ

チャームポイントの眼鏡を外し、三つ編みをほどいて一気に大人っぽい雰囲気に、どこか《蒼の深淵》クロチルダを想起させるのは姉妹ゆえか。





THE LEGEND OF HEROES
暁の軌跡
アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
２月はおなじみの期間限定イベント「ナハトの奮闘記」が開催！
さらに、エマがエレガントな衣装姿を披露！　そして、「極秘資料館」もお見逃しなく！

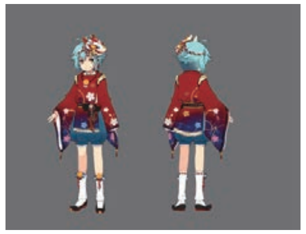
『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

『暁の軌跡』極秘資料館

ロナード＆ジリアン（1年後）
エピローグにて登場したロナードとジリアンの１年後の姿のラフスケッチ



「陰陽師・ミリアム」衣装デザインラフ（2022年２月実装）



「パーティー・エマ」衣装デザインラフ（2023年２月実装）



期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.22 ダドリー編」が実装！

「クロスベル市の廃ビルで武器の闇取引がある――」
正体不明の通報者からの“タレこみ”を受けて現場に向かうナハト。
しかしそこには先客がいた。
ダドリーとともにタレこみの真相をナハトは暴けるのか!?









※このイベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価:本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け!
愛と希望の流れ星!
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿
著:山下憲一
イラスト:さがら梨々
原作:日本ファルコム
好評発売中!
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

第2話

『クロスベルの休日』

西ゼムリア通商会議。
ディーター・クロイス新市長の主催した経済関連の国際会議で、帝国、共和国、リベール、レミフェリアの首脳が一堂に集まった。
自治州クロスベルの未来を決める大切な会議だったのだが、各国の思惑が交錯して事件が起こり、友好的とはいえない雰囲気での幕切れとなってしまった。
大きなうねりに呑みこまれ、クロスベルの街は緊張に包まれている。
それでも、俺たち特務支援課は、目の前で困っている人たちの為に全力を尽くす。いかに小さなことであろうと、その積み重ねこそが、クロスベルの内外にある〝壁〟を打ち砕くことに、繋がってると思うから……

「おつかれさま、ロイド。式典は緊張するわね」
パールグレイの美しい少女、エリィが声をかけてきた。
特務支援課の頼れる才媛であり、マクダエル議長の孫娘である。
「ああ、本当だな。でも、エリィはこういうのに慣れてるんじゃないか？」
「祖父の仕事柄、フォーマルな場に呼ばれることは多いけど、だからといって慣れるものじゃないわ」
「そういうものか」

エリィの様子は、すっごく落ち着いているように見えたが……あれでダメなら、俺なんか、よっぽどそわそわして見えたんじゃないだろうか？
「さすがに、各国のトップともなると、あんな事件があっても堂々としたものね」
「ああ、大したものだよ」
俺たちは式典会場である空港を後にする。
今日は、エレボニア帝国のギリアス・オズボーン宰相と、カルバード共和国のロックスミス大統領の帰国を見送る式典があった。
特務支援課が通商会議の警備に携わったので、その代表者として、俺とエリィが参列したというわけだ。
「ねえ、ロイド。このあとは用事ある？」
「いや……そういえば、セルゲイ課長から午後は休むように言われてたな」
時計を見ると、もう午後一時だった。
「通商会議の前から、ずっと休みを取ってなかったものね」
「仕方ない。会議中は他の支援要請を受けられなかったからな」
歴史的な会議が開かれて各国のトップが集まるとあって、大勢の外国人観光客が訪れ、市内では細かいトラブルが急増していた。
逆に、警察も警備隊も要人の警護に追われ、街の治安維持は後手に回ってしまった。

「市民のことは、遊撃士たちが気を遣ってくれたみたいね」
「そうみたいだな。いつもありがたい」
「本当ね。けれども、また警察が仕事してない、って街の人たちに言われちゃうわね」
「うーん、今回ばかりはつらいところだな。セルゲイ課長には休めと言われたけど……やっぱり、街を見回ったほうが、いい気がする」
「相変わらずね、ロイドは」
くすくす、とエリィが笑う。
我ながら生真面目すぎるとは思うが、これが性分だ。
「エリィはどうするんだ？　なにか予定が？」
「え？　お邪魔にならないかな？」
「これから友人と街を見て巡るんだけど、よかったらロイドも一緒にどうかと思って」
「むしろ、あちらが希望してるの。ロイドも知っている人よ。ロイドは私とふたりで散歩しても巡回みたいになっちゃうけど、他の人がいれば休暇になるでしょう？」
「なるほど、いいかもしれないな」
エリィとふたりで街を歩くのは魅力的だ。
べつに容姿だけが全てではないが、こんな綺麗な女性と一緒にいると思うだけで、いまだに緊張することがある。

いつもの格好も似合っているが、今日は式典の参列ということもあって、街中でしか着られないような服装だった。
白いワンピースを腰のところでリボンで留め、ピンク色のジャケットを羽織っている。珍しく黒タイツではなく素足だった。
エリィと街を巡れたら、きっと楽しいだろう。
けれど、市民への配慮が足りてないと感じている今だと、彼女に指摘されたとおり、散歩というよりも巡回になりそうだった。
「このまま街を歩いて、どこかの店に入ったら、商品を見る前に〝何か困ったことはありませんか？〟と尋ねてしまいそうだよな」
「ふふ、ロイドらしいわね」
「エリィの言うとおり、他の人もいれば、ちゃんと休めるかもしれないな」
「無理にずっと一緒じゃなくてもいいから、お昼くらいは、どう？」
「気遣ってくれてありがとう。喜んで同席させてもらうよ」
それにしても、俺の知ってるエリィの友人って、誰だろう？
クロスベルの中心にある広場へとやってきた。
会議中のお祭りのような賑わいから一転、そこかしこで、自治州の将来について話し合う市民たちの姿が目立つ。

広場に出ている屋台のひとつに、エリィが向かう。
俺は後を追いかけた。
こちらを見つけ、ひとりのシスターが小さく手を振る。
「こんにちは、エリィさん」
「お待たせしました、リースさん」
待っていたのは、リース・アルジェントというシスターだった。
エリィが留学先のアルテリア法国で知り合った友人で、たしか俺たちの、ひとつ年上。十九か二十歳になると言っていた。
清楚な雰囲気のある落ち着いた女性だ。
「こんにちは。俺も同席してよかったんですか?」
「もちろんです。今回は私のほうからエリィさんに、誘ってもらえるよう、お願いしました。よろしくお願いします」
「こちらこそ……その、どういった理由で、俺のことを?」
「食事は大勢のほうが美味しいですから」
「なるほど」
まさか、本当にそんな理由ではないだろう。
何かしら〝後で真実を告げるから今は詮索しないで〟という意味だと受け取った。

なんせ彼女は、ただのシスターではない。
教会内でも特殊な組織――《星杯騎士団》の従騎士だ。
古代遺物（アーティファクト）の回収を目的としており、いくつもの特別な力を持っている。
この街（クロスベル）にも、調査のために訪れているらしい。
リースが、まるで空の女神（エイドス）の教えを説くような、静かで神々しい口調で言う。
「……ロイドさんはクロスベルの出身だとか」
「はい」
「地元の人しか知らないお店も、あるかと思いまして」
「え？　それは……食べ物の?」
「もちろんです」
「あの……ご期待に沿えるかわかりませんが……」
食べることが大好きな人だとは聞いていたが、予想以上に熱心だった。
まさか、本当に〝地元の店を知っていそう〟という理由で呼ばれたんだろうか?
エリィが肩を落とす。
「リースさんが、ロイドも連れて来て欲しい……と言うから、どうしてかと思ってたら……」
「明確な理由と的確な人選のはず」
ぼそっとリースが独りごちた。

ははは、と思わず笑い声をこぼしてしまう。
「まぁ、大丈夫だよ、エリィ。せっかく休暇をもらってるんだし、美味しいものを食べに行くのも悪くない」
「それもそうね」
エリィが微笑んだ。
リースが周りを見渡す。
「まず、このあたりで何か食べますか？」
広場には、いくつか屋台が出ていた。クレープやアイスクリームを売っている。
もう昼だし、てっきりレストランに行くのかと思っていたが、そういうのもいいだろう。
「リースさん、何か気になる屋台はありますか？」
「どれも悪くなかったです。なかなかの味でしたね」
過去形だった。
俺とエリィは首をかしげる。
「もう一通り、食べたことがあるんですか？」
「広場で待っていてほしいと言われたので……」
「ええ」
エリィがうなずいた。

リースが微笑みをこぼす。
「広場で屋台の物を、一通り食べて待っていました」
「えぇっ⁉　全部⁉」
「いえ、全部ではありません。クレープもアイスもポップコーンもカフェも、いくつも種類があるので、全メニューは無理でした……」
残念そうに言った。
どうやら、この広場にある屋台を一通り回った後らしい。
「あの、それじゃあ、お腹は、もういっぱいなんじゃ？」
「どうしてですか？」
冗談めかすこともなく本気でわからない、という顔をして尋ねられた。
こっちが聞きたい。どうしてお腹がいっぱいになってないんだろう？
さすがは、《星杯騎士団》の従騎士だ！
いや、あまり関係ないか。
「なんにしても、大丈夫そうなら、どこかお店に行きましょう。リクエストはありますか？」
「とてもお腹が空いているので、こってりしたものがいいですね」
けっこう食べたはずなのに……
聞いているだけで、こっちのお腹が膨れてしまいそうだった。

これは、生半可なところに連れて行ったら、がっかりされてしまうに違いない。
俺はしばらく考えて——
「よし、龍老飯店(りゅうろうはんてん)に行きましょう」
「どんなお店なんですか？」
「東方の料理を出す店です。あ、辛いものは平気ですか？」
「辛いものも大好きです」
俺たち三人は、東通りへと向かった。



龍老飯店に向かう途中、遊撃士協会の前を通る。
ちょうど、知り合いが扉を開けて出てきたところだった。
逞しい体つきの男性で、茶色い髪を束ね、ピンク色のシャツの胸元をはだけさせている。鍛え抜かれた筋肉が見えていた。
「あら、ロイド。ひさしぶりじゃない」
こちらを見つけて、ニッと笑みを浮かべる。
彼はれっきとした男なのだが、女性みたいなしゃべり方をした。

「こんにちは、ミシェルさん」
「いいところに来たわ。お願いしたいことがあるの」
「えっ？　遊撃士協会が、支援課に……ですか？」
もともと、遊撃士は街の便利屋のような側面を持っており、市民に厚く支持されている。それに倣って警察内に作られたのが、特務支援課だ。
くねっ、とミシェルが、しなを作った。
「そうなの。とっても困ってるのよ～」
エリィは慣れているのだが、リースが目をすがめた。
「クロスベルには、こういう人が多いんですか、エリィさん？」
「ど、どうかしら？　私は、よく知らないけど……」
「そう……さすがは、魔都クロスベル」
ミシェルが話を続ける。
「実は、さるお方にクロスベルを案内する仕事が入ってるのよ。もともとは、アリオスが引き受ける予定だったんだけど、急に別件が入っちゃったらしくて」
「そうなんですか」
「最近、とくに忙しい様子なのよね。何か聞いてないかしら？」
「俺もアリオスさんとは会ってないです」

「そう……」
「他のメンバーも手がいっぱいなんですか？」
「そうなのよ。リンとエオリアは気になることがあって調べてもらってるし、市民からの依頼もひっきりなしなのよね」
「なるほど。俺たちに手伝えることがあれば、いつでも言ってください」
「じゃあ、この件、お願いできるかしら？」
「詳しい話を教えてもらえますか？」
「ええ。ここじゃナンだから……」
　ちょいちょい、とミシェルに手招きされ、俺たちは遊撃士協会の中に入る。
　ドアを閉じると外の喧噪が遠くなった。それだけ中の会話も外に聞こえないというわけだ。
　ミシェルが、リースのほうを見て首をかしげた。
「ところで、そちらのシスターは？」
「はじめまして。リース・アルジェントといいます」
「ああっ、あなたがそうなの。噂は聞いてるわ。愛想がよくて品があって博識なんですってね」
「そんな噂が？　ありがとうございます」
「他のことも聞いてるけど……ふぅん……〝アルジェント〟ね」
「はい」

　品定めするようなミシェルの視線に、リースは静かな笑みを返す。
「まぁ、いいわ。ロイドたちのお友だちみたいだし」
　エリィが首肯して請け合った。
　改めて依頼について説明を受ける。
「依頼はクロスベルの観光案内よ。さるお方が政府の紹介した部分だけでなく、一般市民の暮らしも見たいと希望されてるの。アタシとしても先日の会議があんな幕切れになっちゃったでしょ？　このまま悪い印象を持って帰られたくないと思うのよね」
「もしかして、会議に参加されてた方なんですか⁉」
「フフ、そういうことになるわね。広場に、十四時までに行ってもらえるかしら？　人手がないからアタシが行くしかないと思ってたけど、お願いできるなら助かるわ」
　ミシェルは遊撃士協会の受付だ。事務所を空けてしまうと、いろいろと困ったことになるだろう。
「わかりました。引き受けます」
「ありがとう、恩に着るわ！　アタシから先方に伝えておくから、広場の鐘の前で待ってて」
「それで、先方の名前は？」
「フフ、会えばわかるわよ」
　ミシェルが、ギュッとウィンクした。

遊撃士協会を出て、エリィとリースに相談する。
「俺はミシェルさんの依頼を受けるとして、エリィたちはどうする？」
「先方とリースさんがよければ、一緒に回ったらどうかしら？　クロスベルの観光という目的は同じなのだし、警察官の私たちだけより、教会のシスターの話も聞けたほうが、〝市民の暮らしが見たい〟という希望に叶うと思うの」
「私はかまいません」
「わかった。じゃあ、広場で会って、そこで訊いてみよう。約束の時間まで、もうあまりない」
「そうね。急ぎましょう」
「私は……早く美味しいものが食べられれば、なんでもいいです」
実は、あまり考えずに話してるんじゃないか？
一抹の不安を感じつつ、広場に戻るのだった。

広場の鐘の前につく。
まだ先方は来ていないようだ。貴人らしき相手の姿は見当たらなかった。

ハッ！　とリースが顔色を変える。
「あれを見てください！」
「えっ、何かありましたか!?」
ただならぬ様子に、俺は警戒心を高めた。
エリィもジャケットの下に手を伸ばす。そこには、彼女の得意武器である導力銃が収めてあった。
リースが指さしたのは、ごく普通の屋台だ。
「スイーツの屋台です。さっきまでは、ありませんでした」
「あ、ああ……」
そういうことか。
俺は肩を落とした。
「そろそろ、オヤツの時間ですからね……特定の季節と時間にだけ出てる屋台もあるんですよ」
よく兄貴が買ってくれたっけな。懐かしい。
ほ～、とエリィが吐息をつく。
「驚かさないでください、リースさん」
「あら、驚かせましたか？」
「あの……」

すこし離れたところから、声をかけられた。
振り向くと、ライム色の髪の凛々しい女性が立っている。黒色のスーツに身を包んでいるが、見間違えようもない。
「ユ……ッ⁉」
思わず声をあげそうになり、なんとか呑みこんだ。
エリィも同じく。
要人の身辺警護をするＳＰの格好をした女性は、大陸全土で知らぬ者がいないほどの有名人だった。
ユリア・シュバルツ准佐。リベール王室の親衛隊リーダーを任されている士官。その凛々しい姿や華麗な振る舞いから、他国にまでファンが多い。
「あ、あなたがいるということは……」
その後ろに、視線を向ける。
薄紫色の髪の少女が立っていた。
ガウンを羽織り、膝まである紺色のスカートを履いている。
その立ち姿に漂う気品と美貌は隠しようもないが、服装だけなら、いかにも市井の少女らしい格好だった。
いつもは宝石で飾っている髪に、今日は花飾りをつけている。

クローディア姫だった。
リベール王国の姫で、次期女王として期待されている王太女。
「驚きました……」
俺は思わずつぶやいていた。
通商会議に出席していたＶＩＰとは聞いていたから、なんとか声をあげることは避けられたが。
にっこりと彼女が笑みをこぼす。
「私も驚きました。遊撃士協会の方から〝とびきり腕がよくて、クロスベルの街なら何でも知っている人物に案内してもらうことになった〟とは聞いていましたが、ロイドさんやエリィさんだったなんて」
過大な評価に、恐縮するばかりだ。
ユリア准佐も口元を緩める。
「元々、市内を見たいと殿下がおっしゃられたとき、最初は君たちに話を持っていこうと思っていたのだ。しかし、特務支援課は警察組織……呼び寄せての面会くらいならまだしも、市内観光など頼んだら警備だ交通整理だと大事になってしまうのではないかと危惧してね」
「たしかに、支援要請は警察本部でも確認していますから、とんでもない騒ぎになっていたと思います」

「そこで、遊撃士協会に頼んだのだが……よく気を回してくれたと言うべきか。それとも、これも運命の巡り合わせなのかな？」
「偶然だと思いますけど……ミシェルさんは、この街で長く遊撃士協会の切り盛りをしてる方ですから。もしかしたら、何か意図があったのかもしれません」
そう思えるほど、これは意外な再会だった。
あ、とエリィがリースを紹介する。
「こちら、クロスベル大聖堂のシスターで――」
「えっ!?」
声をあげたのは、クローディア姫だった。ユリア准佐も意外そうな顔を見せる。
リースが丁寧にお辞儀した。
「おひさしぶりです、クローディア姫」
「あら、お知り合いでしたか？」
エリィの問いに、リースたち三人がうなずく。
「はい」
クローディア姫が笑みをこぼす。
「今日は喜ばしい再会の多い日です。それにしても、リースさん、たしか、ケビンさんと一緒のはずでは？　お元気かしら？」

「ケビンは元気ですが、この街に来ていません。本来ならば、様々な調査のため彼自身がクロスベル入りをするのが筋ではあったのですが……大司教の目があったので、代わりに私が情報収集役として派遣されています」
「なるほど。そういう事情があるのですね」
「もうロイドさんたちには話してありますが、街中では、私の素性は内緒でお願いします」
「心得ました。ちょっとドキドキしますね」
「はい」
普通のシスターの振りをする星杯騎士に、市井の少女の振りをするリベール王国のお姫様か。
俺は胃の痛くなる思いがした。
グギュギュ～、と地響きのような音があがる。
「ん？　なんだ？」
「あ……」
リースが困ったような顔をしているのに気付いた。
「どうかしましたか？」
「……私のお腹が悲鳴をあげている」
「そ、そうですか」
今のは、そういうことか。

くすくす、とクローディア姫やエリィが苦笑した。微笑ましい。
ユリア准佐が、改めて依頼を確認する。
「話は聞いてると思うが、君たちにクロスベルの街を案内してもらいたい。観光地などではなく、市民の日々の生活が知りたい、と殿下はご所望だ」
「わかりました……それでは、気取らないお店で食事などいかがでしょうか？　もう昼は済ませてらっしゃるかもしれませんが」
「フフ……そうだな。空腹の方もいらっしゃるようだし……ん？」
ふらふらと歩きだしたリースを、エリィとクローディア姫が追いかける。
「あ、あの、リースさん⁉」
「どこ行くんです？」
スイーツの屋台の前だった。
「パフェのバスケットサイズをひとつ。大盛りで」
かしこまりました～♪　と屋台のお姉さんが、バケツみたいな器に、どばどばとアイスを詰め、フルーツを乗せていく。
受け取ったリースは、目が据わっていた。
「フレークでの底上げなしのバケツサイズ……ボリュームは文句なし。味のほうは……むっ。甘すぎず、それでいて濃厚。フルーツも新鮮。さすがクロスベルのスイーツ。いい仕事してる」

ぶつぶつと独り言のように並べ立てる。
エリィがため息をついた。
「はぁ、リースさんてば……」
「私も頂こうかしら」
クローディア姫が、そんなことを言い出した。
「えっ？　屋台でお求めになるんですか？　歩きながら食べることになりますけど……？」
おそるおそる、といったふうにエリィが尋ねる。
はい、とクローディア姫はうれしそうにうなずいた。
「そういう経験、普段はできませんし。それに、とっても美味しそうなので」
「わかりました……じゃあ、私も一緒に」
なんだかんだ言って、女の子がスイーツを前にしたら買う方向で話がまとまるものらしい。
俺はユリア准佐にも水を向けてみる。
「買わなくていいんですか？」
「いや、私は遠慮しよう」
「やっぱり、ＳＰとして、気は抜けませんか」
「フフ……実は、甘いものが得意ではないのでね」
「なるほど」

そんなところもクールな人だった。
エリィとクローディア姫が、ワンカップのパフェを購入する。
すかさず、リースが近寄ってきた。
「味見、味見させてください」
「あ、はい」
エリィがスプーンにすくって、差し出す。
はむ、とくわえて。
「むむ……ストロベリーのアイスも、なかなか」
真剣な表情をしていた。
クローディア姫が口元を抑えて笑う。
「ふふっ、リースさん、本当に食べることが好きなんですね。私のも食べてみますか?」
「ありがとうございます。大好きです」
「なんだか、照れちゃいますね」
クローディア姫がスプーンを差し出すと、リースが遠慮なく味見した。
「うん、マンゴー味もなかなか……ちょっと甘いけど、小さいカップならちょうどいい。ナイスな選択」
「…………」



まじまじとユリア准佐が見つめている。
その視線に気付いたか、クローディア姫がやってきた。
「はい、ユリアさんも」
「えっ？」
クローディア姫がスプーンを差し出してくる。
ピンク色のスプーンに乗った、黄色いアイスクリーム。
「あ、でも甘いのは苦手だったかしら？」
「いえ、ひと口くらいなら、うれしいです」
「ほんと、よかった」
クローディア姫の差し出したスプーンに、何秒か置いて、ユリア准佐が口をつけた。
「……はむ」
うれしそうに微笑んでいるお姫様に、准佐が優しげな笑みを返す。
ふたりの表情を見て——彼女たちは仲がいいだけでなく固い信頼関係で結ばれているのだな、と俺は感じるのだった。
それから、リースの提案により、俺たちは龍老飯店に向かった。

龍老飯店での食事は、なかなか好評だった。
そのあと、今度は東通りの屋台を見てまわることになった。
クローディア姫が瞳を輝かせる。
「すごいですね。活気があって」
俺も街に詳しいわけではないが、できるだけ丁寧に説明していく。
「野菜や魚は、ここらが安くて新鮮です。珍しい香辛料などは百貨店で買ったりして、市民は使い分けてますね」
「なるほど」
俺の説明に、ひとつひとつクローディア姫がうなずく。
その後ろにエリィとユリア准佐が付き従い。
最後尾をリースが——
もぐもぐしながらついてくる。いつの間にか饅頭を買っていた。
「あの……リースさん、さっきの東方料理の店では足りませんでしたか？」

「いえ、充分に満足したんですが……」
「ソレは、いったい……？」
「お饅頭が美味しそうだったので」
「な、なるほど」
到底、真似できそうになかった。むしろ理解できない。
「食べたいですか？」
「お気持ちだけいただいておきます」
「そうですか。ところで、このへんにカフェはありませんか？」
「どうしました？」
「飲み物が欲しいです」
俺はエリィと顔を見合わせる。
「いいのかな、このままだと、クロスベル観光というより、クロスベルのグルメ観光になっちゃいそうだけど」
「うーん、予想外だったわ。美味しい店に行く予定ではあったけど、ずっと美味しい店を巡ることになるとは思ってなかったから」
くすくす、とクローディア姫が微笑する。
「かまいませんよ。できれば、みなさんがいつも使っているカフェを教えてください」

行く先にユリア准佐は意見がないらしく、むしろ周囲を警戒している様子だった。
この近くで、カフェというと――
すぐに思い至った。
「いい店があるんです。支援課ビルの近くのカフェに案内します。焼きたてパンが自慢のオープンカフェなんですよ」
「まあ、素敵ですね」

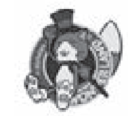
俺たちは、西通りのベーカリーカフェ《モルジュ》に足を運んだ。
煉瓦の建物からはパンを焼く香りがただよっている。店の前は、パラソルテーブルのならぶオープンカフェになっていた。
クローディア姫が、手を合わせる。
「まあ、かわいらしいです」
納得顔でリースがうなずいた。
「クロスベルでカフェといえば《モルジュ》……いい選択してる」
「リースさんも、よく来るんですか？」
「もちろんです。けれど、いつもはパンを買って帰るだけなので、カフェでゆっくりするのは初めてです。楽しみです」

リースが一足早く店へと入っていく。
このカフェであれば〝市民の日々の生活が知りたい〟という希望に添うのではないだろうか。
店構えを見ていたクローディア姫が、ふと立ち止まった。
「あ、このお店は……」
「何か気になることがありましたか？」
「たしか、クロスベル新聞(タイムズ)に記事が載ってました」
「ああ、以前、紹介されたことがあったとか」
「市民の憩いのお店だそうですね。うれしいです。こういう場所を訪ねてみたかったんです」
「それはよかった。オスカーが聞いたら喜びますよ」
「オスカーさん？」
「あ、俺の幼馴染みが、ここで働いてるんです。店主のモルジュさんの一番弟子として。それに、モルジュさんの娘のベネットも同じくらいがんばってます」
「仲のいいライバル、といった感じかしら？」
「そうですね」
「ふふっ、楽しそうです」
結果的に、リースのおかげで、いい案内になったようだ。そのリースが、あわてて店から飛び出してきた。

いつもの余裕のある表情ではない。
「ロイドさん！　大変です！」
「えっ!?」
「早く来てください！」
「あ、はい！」
俺は急いで店のなかに入る。
エリィとクローディア姫とユリア准佐もついてきた。
こっちこっち、とカウンターの奥からリースが手招きする。
奥の扉の先は、たしか、パン作りの厨房になっているはず。
入ってしまっていいのかな？　と思いつつ店内を見渡すが、誰もいない。
買い物客の少ない時間帯なので、来客がないのはともかく、店主のモルジュもオスカーもベネットの姿もない。
カウンターに誰もいないというのは初めてのことだ。
嫌な予感がする。
俺は奥の厨房へと急いだ。
そこに、モルジュが倒れていた。
彼を囲んで、オスカーとベネットがしゃがみこんでいる。少し離れてリースも。

俺は駆け寄った。
「モルジュさん⁉　どうしたんですか⁉」
「う、う〜ん……俺は、もう……ダメだぁ〜……」
うめくモルジュを心配そうに見て、オスカーが声をかける。
「バカ言わないでくださいよ、腰を痛めただけじゃないですか！」
「う〜ん……」
「父さん、しっかりして！」
「ベネット……あとは……頼んだぜ……」
「そんな！」
「そのパン生地、ちゃんと焼いて店にならべといてくれよ」
「う、うん。それは、やるけど」
「あと、やわらかい小麦粉が少なくなってるから、ちゃんと注文を……」
「それが大切なのはわかるけど、そんな場合じゃないでしょ⁉　父さんってば‼」
俺は立ち尽くしていた。
「なあ、オスカー……モルジュさんは、腰を？」
「そうなんだ。重たい物は俺が運ぶってんのに、小麦粉の袋を二つも持つからよ」
「どうするんだ？」

「とりあえず、俺がウルスラ病院まで連れてく。ベネット……店は頼むぜ？」
「う、うん！」
黒髪を留めるヘアバンドを付け直し、ベネットがうなずいた。
俺は前に進み出る。
「オスカー、それなら、俺たちが病院に……」
「いや。ありがたいけど、親方は俺の師匠であり、親父みたいな人だ。これは俺の役目だと思うんだよ」
「そうか……わかった」
「ロイド、よかったら、ベネットを助けてやってくれ」
「だ、大丈夫よ！　私ひとりだって平気！　早く行きなさいよね」
「おう。病院に着いたら連絡するぜ——さあ、親方、かつぐからな？」
「う〜ん……オスカー……すまんな〜」
「なに言ってんだ、ウルスラ病院に行けば、すぐ治してくれるさ。よいせっ」
「うう〜ん」
オスカーはモルジュを背負うと、病院に向かった。



残されたベネットが青ざめた顔をしている。

「どうしよう……」
「ベネット、ひとりで大丈夫なのか？」
「あ、はい。何にしましょう？」
俺の問いかけに、そんな言葉を返してきた。ちょっと混乱しているようだ。
「いや、まぁ、客として来たんだけど……」
スンスンとリースが鼻を鳴らす。
「パンの焼ける匂いが強くなってきましたね」
「あっ！」
ベネットが叫んで、あわてて釜を開けた。
素早く中からロールパンを取り出す。
「あぶなかった～」
「素晴らしい香りですね。これは、いい焼きたてパンです」

「あ、ありがとうございます」
リースが絶賛して、ベネットが頬を赤らめた。
エリィが尋ねる。
「この時間から、まだパンを作るんでしょう？　カフェやレジはどうするの？」
「うっ……それは……ひとりで三人分やるしか……」
「臨時休業が現実的な手段ではないか？」
ユリア准佐が提案した。
その通りだろう、と俺も思う。
「それでは、この焼きたてのパンたちがかわいそうです」
リースが残念そうにつぶやいた。
エリィも目を伏せる。
クローディア姫が進み出た。
「あの……よかったら、私にお手伝いさせてもらえませんか？」
「えっ!?」
驚いたのは、ベネットばかりではない。その場にいた全員だった。
「素人がお手伝いなんて、かえってお邪魔かもしれませんけど……私、このオープンカフェに来るのが憧れでした。お店が休みになったら、すごく残念です。他のお客さんたちも、同じじ

ゃないかしら？」
俺はうなずく。
「たしかに、まだ観光客は残っているし、外国からのお客さんも来るだろうな……ベネット、俺にも何かできることがあれば手伝わせてもらうよ」
エリィも賛同してくれた。
「そうよね。地元の人たちも、このお店のパンを楽しみにしてるはずだもの。私たちに手伝えることないかしら、ベネットさん」
ベネットがうつむく。
「……オスカーも、父さんの前だから、任せるって言ったけど、臨時休業でも仕方ないって考えてると思う」
やっぱり難しいか、と諦めかけた。
しかし、ベネットが、クワッと顔をあげる。
「だからこそ！　なにがなんでも店は閉じたくないんです。私、オスカーを驚かせたいし、父さんやお客さんをガッカリさせたくない――みなさん、力を貸してください！　お願いします‼」
これ以上ない、というくらい頭を下げられた。
「もちろん」

俺はうなずいて、エリィも同じだった。
クローディア姫が、ユリア准佐の手を取る。
「ユリアさん、私のわがまま、聞いてくれますか？」
一国の王太女が、パン屋の手伝いである。普通なら猛反対してもおかしくない。
ユリア准佐が考えこむ。
やがて、キリッと結んだ唇を開いた。
「私が殿下のなさることに反対するはずがありません」
頭を垂れた。
クローディア姫が安堵した笑みを浮かべる。
「ありがとう、ユリアさん！」
「いえ、私は殿下がご無事であれば」
「ふふ……それでは、ベネットさん――私とユリアさんは、何をすればいいですか？」
私も手伝うんですか⁉　という顔をユリア准佐が浮かべた。
しかし、抗議はせずに指示を待つ。
なんというか、さすがだった。
リースが片手を挙げる。
「パンの作り方なら、一通り習得しています。厨房で手伝えることがあるでしょう」

こちらも、さすがだった。
ベネットが思案する。
「それじゃあ、ロイドさんは小麦を運んだりといった力仕事をお願いします」
「わかった」
「シスターさんは、私のアシスタントということで厨房を」
「はい」
「エリィさんにレジをお任せして」
「わかったわ」
「おふたりにカフェのウェートレスをお願いしたいのですけど、どうでしょうか?」
ベネットの提案に、クローディア姫がうなずいた。
「はい。がんばります」
「……客の前に出るのは……いや、厨房よりは安全か。了解した」
ユリア准佐もうなずく。
全員が引き受けたところで、改めてベネットが頭を下げる。
「ありがとうございます。あっ、私ったら、まだお名前をうかがってませんでした」
クローディア姫が固まる。
ユリア准佐が視線を逸らした。

まずリースが率先して。
「何度かお店には来ていましたが、名乗るのは初めてですね……先日、クロスベル大聖堂に赴任しましたリース・アルジェントといいます。よろしくお願いします」
「あ、はい。ベネットです。いつもありがとうございます！　今日は、よろしくお願いします！」
そのやり取りの間に落ち着きを取り戻したクローディア姫が。
「リベールから観光に来ています、クローゼといいます。こちらは、ユリアさん。私たち、学生で親友同士なんです」
「が、学生……？」
ぼそり、とユリア准佐がつぶやいた。
「なるほど……」
ベネットがいぶかしむ。
「……う～ん、どこかで見たことがあるような？」
俺は冷や汗を垂らした。
どこかで見たことがある？　それは、新聞の記事じゃないかな？
俺はベネットをうながして。
「早く準備をしよう、慣れてない仕事だから、いろいろ教えてもらわないと」
「そうね。あ、替えのエプロンを出すから。みんな、それを付けて」

ベネットの指示に従い、小麦粉を持ってきたり、水を汲んできたり。
「うん、バターロールパン、焼き上がり！　ロイドさん、持っていってもらえますか？」
「わかった」
トレーに積んで、厨房を出る。
早くもレジには客が並んでいた。
エリィがこちらに気付いて、声をかけてくる。
「おつかれさま、ロイド。ちょっとお願いできるかしら？」
「ああ」
レジにエリィと並んで入って、パンを紙袋に入れる手伝いをする。
ニコニコした老婦人が。
「おや、珍しいわね。ロイドさんにエリィさんじゃないの」
「ちょっと事情がありまして、今日は俺たちが手伝いに入ってるんです」
「そうなの、大変ねえ」

「いえ……お待たせしました」
パンを入れた紙袋を渡す。
また次のお客さんのパンを紙袋へ。
これだけ大勢の人たちに無駄足を運ばせることにならなくてよかった。
そうしていると、エプロンドレス姿のクローディア姫が、レジにやってきた。
「あの！」
「ん？」
「注文を受けたんです！」
瞳を輝かせて、頬を上気させていた。
当然、オープンカフェでウェートレスをしているのだから注文は受けるだろう、と言うのは無粋だ。
なんせ、彼女は生まれて初めて注文を受けたのだから。
「わかりました。何を出せばいいですか？」
「カフェオレ、砂糖を多目です。それと、オレンジジュース。あと、オススメの焼きたてパン」
「やり方は聞いてありますから、やってみます」
「ええ、お願いします」
クローディア姫が客席に出ていく。

キャ〜〜〜⁉　と黄色い歓声があがった。
ユリア准佐が注文を取りに行ったところ、女性客が騒ぎだしたらしい。
まさか、もうユリア准佐だとバレてしまったか⁉
女性客のひとりが尋ねる。
「あの！　あの！　リベール王国のユリア・シュバルツ准佐に〝似てる〟って言われませんか⁉」
「ッ⁉　そ、そうですか……どうでしょうか？　あまり似てないと思いますけど……」
「え〜っ、似てますよ〜‼」
「……困ったな」
あのユリア准佐がたじろいでいた。
髪型など変えて変装しなくていいのか尋ねたとき——クローディア姫ならともかく、異国で自分のことを気に掛ける者などいるまい、と笑っていたが。
すっかり囲まれていた。
黒服のユリア准佐は、主に女性客に大好評だ。
お客さんたちは、まさか本物だとは夢にも思っていない様子だった。
クローディア姫のほうも、男性のお客さんたちから。
「似てるって言われない？」
と訊かれていたが……
「よく言われます。でも王太女がカフェで店員をしてたら、びっくりですよね」
そう笑って返していた。
たしかに、改めて見ると、びっくりだ。

レジに並んでいる客がいなくなったので、俺は厨房へと戻った。
「こんな感じですか？」
「そうそう」
リースが、ベネットからパン作りを教わっていた。
「あれ？　パンを作るのは任せられないんじゃ？」
「試しに形を作るのをやってもらったら、リースさん、すごく上手いのよ」
「簡単なものしか無理ですが……」
「それでも、充分に助かるわ」
「順調そうだな。よし、俺は、他に何したらいい？」
「あ、倉庫からミルクを運んできてもらえますか」
「わかった」
しばらく厨房でパン作りの手伝いをしていた。

　ふと外が騒がしいことに気付く。
　ベネットが首をかしげた。
「なにかあったかしら？」
「見てこよう。ちょうどパンも焼けたしな」
　俺は厨房の扉を開いた。

　明らかに人の声が多くなっている。
　なんとカフェに座りきれないほどの客が来ていた。
「どういうことだ……!?」
「あっ、ロイド！　カフェのほうを手伝ってちょうだい！」
　エリィの声から余裕が消えている。
　レジを待っているお客さんの人数も、明らかに増えていた。
　オープンカフェへ視線を向ける。
　三つのテーブルの六人から、ユリア准佐に次々と注文の声が飛んだ。
「私は、カフェオレ」
「えっと、アタシは、カフェモカで」
「あの～あの～オレンジジュースとドーナッツ。あ、やっぱり、ホットコーヒーとフレッシュ

サンドで」
「こっち、ベルベリージュースね。あと、ベーコンレタスサンドのレタス抜き」
「ミルクロールと……クロワッサンにしようかな～。ドーナッツがいいな。うん。それでお願いします」
　ユリア准佐がうなずく。
「そちらから――カフェオレ、カフェモカ、ホットコーヒーとフレッシュサンド。ベルベリージュースとベーコンレタスサンドのレタス抜き、ミルクロールとドーナッツですね。少々、お待ちください」
　おお～、と歓声さえあがった。
　さすがはユリア准佐だ。
　クローディア姫がレジに戻ってくる。
「ふぅ、ウェートレスって大変なんですね。行ったり来たりが……」
「そうみたいですね」
「どうしてかしら？　男性のお客さんって何人かで来ても、一度に注文しないで、ひとりずつ頼むことがあるんですね。とくに二杯目のとき」
「ああ、なるほど……」
　それは、おそらく、クローディア姫に（よく似たウェートレスだと思っているはずだが）何

度もテーブルに来て欲しいからだろう。
「お疲れじゃありませんか？」
「いいえ、なんだかダンスか剣術の稽古みたいで楽しいです。最近、飛行船に乗っているか、ホテル暮らしばかりでしたからね。呼ばれたら、あちらへこちらへ、行ったり来たり」
本当にうれしそうに話す。
俺はうなずいて聞いていた。
また呼ばれて、クローディア姫が小走りに出ていく。
「はい、ただいま！」

陽が西に傾きかけた頃、オスカーから連絡が入る。
ちょうど、俺が倉庫から小麦粉を持ってきて、リースが水を汲んできたときだった。
ベネットが厨房に持ってきておいた導力通信機に飛びつく。
小麦粉で真っ白になった手のまま。
「はい！」
『俺だ。そっちはどうしてる？』
オスカーの声が漏れてきた。
あちらに見えているわけではないけど、ベネットが胸を張った。



「ちゃ〜んと店は開けてるし、新記録ってくらい繁盛してるわよ！」
『えっ、開けてるのか⁉』
オスカーの驚いた声に、ベネットがうれしそうな顔をした。
「当然よ」
『ロイドたちに手伝ってもらってるのか？』
「うっ……まぁ、そうだけど……」
『そうか。ちゃんとお礼、するんだぞ』
「言われなくてもわかってるわよ！　子ども扱いしないで」
『ああ』
「……それで、父さんは？」
『それがなぁ……』
「………」
『なんか、東方から来てる先生がいて、ひっぱったり、もんだりしてもらったら、ほとんど痛みが引いたらしいんだ』
「えっ⁉　ホント⁉」
『しばらくは休養が必要らしいけどな。今日にでも導力バスで帰れそうだよ』
ベネットが涙ぐんで目元をぬぐう。

顔が小麦粉で白くなった。
「よかった……ホント……よかったよ〜」
『ああ、まったくだ。しばらくは、俺とふたりになるけど、まぁ、がんばろうぜ』
「うん」
『じゃあ、これから帰る』
「……まってる」
ベネットが涙声で、うなずいた。
俺はリースと顔を見合わせて、互いに笑みを浮かべるのだった。

オスカーとモルジュが戻ってきたのは、七時近く。
一番、店が混雑している時間だった。
そんな最中にウェートレスやレジ打ちが抜けるわけにはいかない。
結局、お店が閉まる八時まで、お手伝いを続けた。
クローディア姫とユリア准佐（によく似たウェートレス）のおかげで、いつにも増して来客が多かったのも一因だったが。

閉店後——

モルジュをベッドに寝かせたあと。
オスカーとベネットが深々と頭をさげる。
「ありがとうな、ロイド！　本当に助かった！」
「ありがとうございました‼」
「いや、今回は俺じゃなくて、クロ……クローゼさんに、お礼を言ってくれ。言い出したのは彼女だから」
クローディア姫が手を左右に振る。
「そんな！　私なんて素人ですからお役に立てたかどうか。それより、こんな貴重な体験をさせてもらって、本当に感謝しています。どうか、面（おもて）を上げてください」
おもて？
ユリア准佐が、コホンと咳払いする。
「少々、時間が遅くなりました。もう帰りませんと」
「そうですね。名残惜しいけど……」
「あの……これ、たいした額じゃないんですけど……」
ベネットがアルバイト代を払おうとしたが、クローディア姫が首を横に振る。
「本当に、私のほうがお礼したいくらいなんです。だから、そういうのは、お気持ちだけで大丈夫ですから」

リースも辞退する。
「シスターがアルバイトするのは問題がありますので」
「俺たちも警察官だからな」
実績に応じて報酬は支払われるが、それは警察本部からであって、助けた市民からではない。
戸惑ったようにベネットがオスカーを見る。
うーん、と彼は考えてから。
「気持ちか……それじゃあ、これは受け取ってもらえないか？　売れ残りで申し訳ないんだが」
紙袋いっぱいにパンを入れる。
これには、クローディア姫も笑みを浮かべた。
「うれしいご褒美です。ありがとうございます」
リースもご満悦。
「うん……もしゃもしゃ……美味しいです。ありがとうございます」
早くも食べていた。
みんなの頭に汗マークが浮かぶ。
苦笑しつつ、俺もありがたくオスカーからパンを受け取った。
「支援課のみんなと分けさせてもらうよ」
エリィもうなずく。

別れ際はオスカーが笑顔で片手を振り、ベネットが何度も頭を下げた。

翌日——

リベール王国のクローディア・フォン・アウスレーゼ王太女を見送る式典が催された。
例によって、俺はエリィと式典に呼ばれている。
クロスベル空港の式典用のスペースに、ずらりと並んだ参列者たち。その末席に、俺たちは立っていた。
高速巡洋艦《アルセイユ》へ乗りこむ前のクローディア姫を記者たちが囲んでいた。
無数のフラッシュが浴びせられている。
彼女と昨日、街を歩き回ったなんて、自分の記憶が嘘みたいだ。
大勢の記者のなかで、うまいこと陣取って質問を投げたのはクロスベル新聞（タイムズ）のグレイス記者だった。
「殿下、クロスベルの街をご覧になりましたか？」
「はい。とても活気があり、困難に立ち向かう力がある……若々しい街だと思いました」
「そのなかで、一番印象深かったのは？」

「どこも大変素晴らしく……」
そこまで言ってから、ふとクローディア姫が参列者に視線を巡らせた。
目が合った、ような気がした。
気のせいかもしれない。
しかし、彼女が微笑んだのは間違いない。
ユリア准佐まで、そっと口元を緩める。
クローディア姫がやわらかい笑みをうかべ、それから唇を開く。
「パン屋さん……そう、クロスベルの街のパン屋さんが印象的でした」



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.145

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.145プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『イース・メモワール -フェルガナの誓い- 』をプレイしてみたいと思いますか？
　アンケート②『イース-フェルガナの誓い-』はプレイしたことがありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イース・メモワール -フェルガナの誓い- 最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

応募締め切り　3月27日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。